



# JEG ニュースレター 181号

www.jegschweiz.com

2021年12月12日

## 小さな証

信仰を持つ両親の元で育った少女時代。そして不慮の事故で父を亡くし、稀にみる環境のなかで育った若きリユート奏者の小さな証。 P2



## 神さまへの贈り物

今年一年を振り返ると、様々な思いが胸に去来します。感謝、恵み、祈りの応え、そして希望を神様への贈り物として綴りました。 P4-P8



## また会う日まで

デュッセルドルフ日本語キリスト教会の長老片岡惇兄は10月7日、エリザベート・デベリン師 (OMF宣教師) が12月2日に父の御許に還られました。 P3



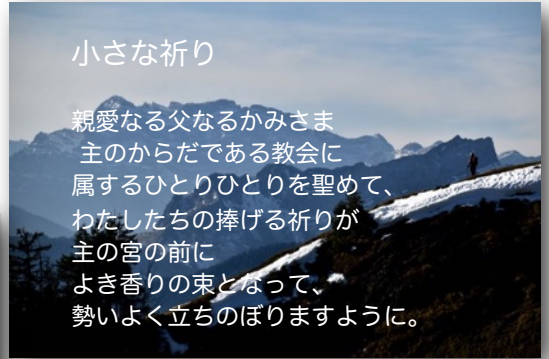
## Every Man a Worrier

男性が人生の様々な領域での戦いに勝利し、神が意図した勇士となることを願う男たちの学びが3月から始まりました。 p9-p11



## 小さな祈り

親愛なる父なるかみさま  
主のからだである教会に  
属するひとりひとりを聖めて、  
わたしたちの捧げる祈りが  
主の宮の前に  
よき香りの束となって、  
勢いよく立ちのぼりますように。



何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。 **ピリピ人への手紙 4章6~7節**

## 「神様への贈り物-小さな光が繋がって」

クリスマスの頃になると、非日常を忘れさせてくれるようなイルミネーションの世界が現れ、人々に明るい、暖かな、希望や喜びが感じられる雰囲気が溢れます。一つ一つの光はとても小さいのですが、それらが繋がって輝く時、何とも綺麗で素晴らしいものとなります。

今年一年、あなたにとって、御家族、友達、知り合いの方々、教会で集会で何か神様へお捧げする小さな、感謝、恵み、祈りの応え、希望などがありますか？





## ちいさな証

一日一日が奇跡の日々  
タリーサ久実・ウィットマー  
スイス日本語福音キリスト教会

今回、証を分かち合うお話しを頂き、何を話そうか思い巡らしていた時、14年ほど前の母教会での証会の録音に出くわしました。そこには私の両親の証もありました。

ざっと紹介すると、2人は共に東京で自営業をしながら、7人の子供をホームスクールで教育して常に多忙で、職業柄体の痛みと闘いつ

つ納期に追われ、不安定な収入や子供の教育における自分たちの足りなさを自覚させられと、ある意味、生活に不満がある。と同時に、信仰により全く不安がない。「一日一日が主の守りによる奇跡の日々と感じ、子供がちゃんと育っているのが不思議。神さまは決してケチなお方ではなく、むしろ私達に契約の祝福をお与えになりたいのだと、みことばと経験を通して神様が教えてくださっている。だから、主に在って希望を持つなら、その希望は大きい方が良い」という励ましの内容でした。

母にその録音を送ると、母は自分が14年前にどんな証をしたかは覚えておらず、証の録音を聞いた母は、夫の証と自分の証にとっても励まされ、当時のこれらの言葉もまた、神様が口に備えて下さったものだと思う、と言っていました。

実は、私の父はこの証をした1年半後のある朝、突然、交通事故で天に召されました。その朝家を出る時、母に「今晚帰ったら、昨日やった詩篇4篇をまたみんなで学ぼうねあー、楽しみだ。」と言ったのが、父の最後の言葉でした。その後の私たちの生活はそれまでと大きく変わったことは言うまでもありませんが、神様は、私達のために日夜体を張って家族を支えていた父が居なくなった後も、両親の証にあった通りに、神の恵みと不思議な奇跡の連続によって、私達の生活と教育を守って下さいました。

聖書にはダビデの時代に、いかに音楽を通して神を崇めていたかが記されていますが、「豊かな現代こそ、賛美もダビデの時代のように豊かであって良いはずだ」という

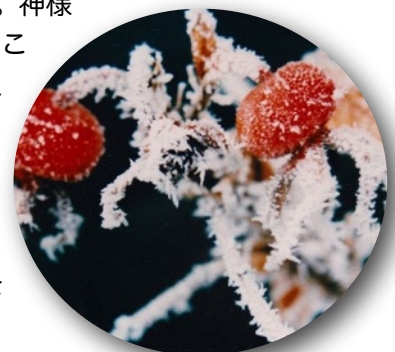
思いから、父は自分の家は主を賛美する家庭であろうと願い、導いてくれました。父自身も音符を学ぶことから始め、家族皆で合唱練習に参加するようになりました。私達子供は、子供ながらにJ.S.バッハなどのみことばを伴う素晴らしい音楽に魅了されて、やがて幾人かは音楽を専門的に学びたい思うようにもなり、その方向で歩んでいました。一家の大黒柱が居なくなったので、その思いを諦めるしかない他の子も私も思いました。しかし、母はとにかく祈りつつ、各々音楽などの学びを続けよう子供達を励ましてくれました。主は母にその力と思いをくださり、そしてその祈りを聞いて下さいました。

今私たち子供は皆、音楽家の働きをしています。特に秀でた才能もない7人全員が相当悩みながら主と自分自身と向き合ってきたと思います。神様は私達が諦めそうな時も何度も助け忍耐させて道を備えて下さいました。沢山の方の助けを通して愛と励ましを注いで下さいました。そこには、主の教会・兄弟姉妹の祈りが常にあったことを覚えます。交わりと繋がりを通して、家族と信仰の友の尊さを教えられています。どこに居てもキリストに在って一つとされ、祈りで繋がっていることを覚えてそれを成し下さるイエス様に感謝します。

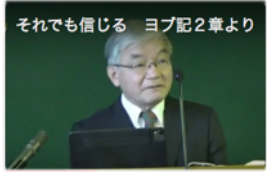
「主が良くしてくださっていた。全ては神の恵みに他ならない。」と、母、姉妹とともに、心からあわれみ深い主に感謝します。(詩篇4、9、15:5-6)

私の弱さも脆さもご存知の主は、祈ると慰めて下さり、力と喜びを与えて下さいます。これらすべてを通して主は私たちの父であり、御霊が友でいて下さると、繰り返し教えて下さいます。(ローマ8:18-39)既に勝利して下さったイエス様に感謝し、神のことばを抱きしめて生きていきたいと思ひます。神様は豊かに祝福なさるためにこの世を創造し、人を神の似姿に創造したことを覚えて、主と共に歩めますように祈ります。

生きておられる神を慕って、父と呼べる幸いを感謝しつつ。



1、ゲストメッセンジャーならびに講壇交換



講壇交換で奉仕される矢吹博牧師

2021年の後半期には、スイス各地ならびにドイツからゲストメッセンジャーを迎えました。8月8日は、マイヤー牧師の後任で奥多摩福音の家の施設長をされていたトラウゴット・オッケルト宣教師（東日本大震災の際、流浪の民となった原発に一番近い教会であった福島第一バプテスト教会会員・佐藤彰牧師を一年間奥多摩福音の家でお世話された。）、ウエスト・ハンス元牧師、矢吹博牧師（フランクフルト日本語福音キリスト教会）スイス滞在中のフーサー・シモンOMF宣教師に、みことばを取り次いでいただきました。

多くの責務と職責を負うマイヤー牧師の激務の軽減ということもありますが、違った視点でみことばにアプローチできるというメリットがあります。

2、ママの会あらため”ひめっこ”発足

11月の初めから、2週間に一度、金曜日の夜8時半から、ほぼ子供達が寝静まった時間にCSの子供達のお母さんたちの交流場を持っています。先日3回目の集まりにおいて、”ひめっこ”という名前がつけました。私たちの王である天のお父様の娘たちの集まりです。プリンセス会との姉妹のつながりをも感じさせるかと思えます。子育て真っ最中の若いお母さんたちに混じって、子育てをほぼ終えた2人の娘、しのぶ姉と筆者千香子が参加しています。

”見つけた子育ての喜び”という御言葉に基づいた子育てテキストブックを学ぶ時と、近況と祈りの課題をシェアする時とを交互に持っています。

3回を終えて感じていることは、たった2週間に一度約1時間半のzoomでの交流ですが、言葉を交わしてお互いを知り合うことが相手に対して愛を増し加えていくためにも、どんなに助けになり大切なものかと感じます。夜の8時半にお母さんたちが会って話すことができるのはZoomがあつてのことです。もちろん実際にあって言葉をかわすことに越したことはありませんが、コロナ前の時代に固守しないでコロナ時代を嘆くのではなく、主にあって今置かれたところで喜びをもって交わりを楽しみたいと思っています。

どうぞ、ひめっこの祝福をお祈り下さい！！ トムセン千香子

3、デュッセルドルフの片岡惇兄、そしてエリザベート・デベリン元宣教師が召されました。

10月17日午後6時半に片岡惇兄が天の故郷に還られました。欧州で初めて創立された日本語教会デュッセルドルフ日本語キリスト集会で、1976年9月18日に洗礼を受けた第1号の6人のうちの一人が片岡惇兄でした。片岡兄はNECドイツ社長、商工会議所会頭や日本人会会長などの重責をこなすかわら、教会の創立期に力を注がれました。あの笑顔絶えぬ気さくなお人柄と関西弁で、多くの人が心ませつつ、薫陶を受けたものでした。片岡兄、地上での多くのお働きを終え、いま、イエスさまの身許で憩われている姿を想像しています。本当にお疲れさまでした。



エリザベート・デベリン元OMF宣教師は、1957年にバーゼルから日本へ宣教のために渡航しました。彼女の心からの願いは、北海道の人々にイエスの福音を伝えることでした。語学を学んだ後、短期間ですが教会で働いたこともあります。残念ながら、さまざまな理由で2度目の来日はできませんで

した。それ以来、彼女はバーゼルで元の職業である小学校の教師として働いていました。

しかし、日本と日本人を愛する彼女は、日本のすべてのものに対する愛情と熱意を持ち続けました。彼女は日本語を学び続け、バーゼルの日本人との交友を求め、家庭集会にもしばしば同行したものでした。時折、JEGの礼拝にも参加し、また、修養会への参加も心から楽しんでいました。日本に帰りたいという願いが叫び続けたのは40年前でした。彼女は教壇に立つことをやめ、札幌の若い家族の子供のお世話を手伝いました。退職後、鉦路の若いドイツ人宣教師のもとに戻り、そこで生徒に英語を教えていました。エリザベートは、ドイツ人宣教師が急に帰国することになったとき、この小さな会衆の面倒を3カ月間一人で見たこともあります。それは彼女の大きな喜びであったようです。

晩年はバーゼル郊外のクリシュナーの老人ホームで過ごし、12月2日の早朝に主の許しを得て、永遠の家に入られました。

ジョアンヌ・ハウリ元OMF宣教師

4、22年に亘る欧州での働きを終えて、安藤廣之牧師ご夫妻が12月21日に本帰国されます。長期の尊い宣教の業に感謝します。



1999年の11月にデュッセルドルフへ家族で移り住みました。デュッセルドルフ日本語キリスト教会の牧師として招聘され約10年間奉仕をさせていただきました。その後在欧日本人宣教会の派遣宣教師として、ミュン

ヘンでの日本語教会開拓に携わりました。

すでに20年程の歩みをしてきたミュンヘン聖書の会と協力し、日本語の礼拝をスタートしました。2011年には教会の設立式と夫婦として牧師・伝道師の授手礼式を執り行うことができました。デュッセルドルフ赴任当時は6歳と3歳だった娘達も今は社会人となり、私達の帰国後もミュンヘンでの生活を続けます。次女は来年の夏、結婚に導かれることにもなりました。

帰国後は福島県いわき市の同盟基督教団いわきキリスト教会に所属し、協力教師として(2つの無牧の教会で)奉仕させて頂く予定です。これまでの欧州での様々な交わりを心から感謝しています。帰国後も欧州の日本語での伝道の働きの為、お祈りしていきたいと思っています。

安藤廣之・里佳子

5、第39回ヨーロッパ・キリスト者の集いの第一信が発行

8月4日から7日まで南独シュトゥットガルト郊外で開催される予定の第39回ヨーロッパ・キリスト者の集い(テーマ:キリスト者にある自由)の第一信が12月10日に発行されました。このたびの集いもスイス日本語福音キリスト教会、フランクフルト日本語福音キリスト教会、南ロンドン日本語キリスト教会から召された7人の実行委員によってこれからの準備作業が行われます。

6、世界各地からホットな情報が満載の月報/ニュースレター&メルマガが届いています!

工藤篤子メルマガ、井野葉由美メルマガ、吉村美穂NL、バルセロナ日本語で聖書を読む会月報、デュッセルドルフ日本語キリスト教会月報、ケルン・ボン日本語キリスト教会月報、ルーマニア川井勝太郎宣教師の週報、イザール通信、森ゆり空レタ配達人、”宣教の声”が届いています。お読みになりたい方は、松林までご連絡ください。なお、スイスJEG会員の姉妹は、HPでパスワードを入れ、いつでも閲覧可能です。





「神様への贈り物ー小さな光が繋がって」

「今」は神様からのプレゼント

矢部晶宏

オーストリア在住 OM宣教師



ルーマニアから川井先生を迎えて

「・・・。正直に言う。がんだと思う。」ベテランの医師は顔を曇らしてそう告げました。気丈に振舞っている妻を横目に、私は泣き崩れました。

昨年末、主なる神さまは奇跡的な出来事をもって私たち家族をオーストリアへと派遣してくださいました。それから半年後の6月、妻の幸恵が乳がんの診断を受けました。主のあわれみにより、幸い全身転移はしていませんでしたが、浸潤性のやや強いタイプで脇下のリンパまで広がっており、抗がん剤、手術、ホルモン治療（放射線）の治療方針が決まりました。現在は抗がん剤治療中で（1月中旬まで）、その副作用に苦しみながらも、妻はイエスさまと勇敢に闘病生活を送っています。

世界中の方々が祈り、様々な形でサポートしてくださっています。スイスJEGの方々からも大きな励みや寛大なご支援をいただきました。心からありがとうございます。近況は定期的にホームページで報告しています。

[www.yyministry.com](http://www.yyministry.com)

これからどうなるんだろうという不安や恐怖に襲われ、主なる神さまにしがみついた日々。その中で、主は私たちに恵みをもって臨んでくださいました。

「今」は英語でpresent（プレゼント）といいます。普通に生きてると、何年後も生きていだろうと過信し、ずっと先のことを思い煩い、今この時をないがしろにすることがありますが、明日が必ず来る保証はどこにもありません。「今」は神さまからのプレゼント、天からの祝福であることが分かりました。

宣教師の課題の一つは、現地社会に受け入れられるかどうかですが、病を通して、教会内外の多くの人が短期間のうちに私たちを受け入れてくれました。診察に同席してくれた

り、家に呼んでくれたり、食べ物を持ってきてくれたり、深夜妻が熱を出し病院に急がなければならない時には、近所の人が来て子守りをしてくれたこともあります。

医師は根治を目指して治療してくれています。私たちは幸恵のうえに主イエスさまの完全ないやしを確信し祈り、できる限りの努力をしています。でも「人は必ず死ぬべき存在」という厳粛な事実を今ほど考えたことはありません。そしてその事実毎に天国へと目が向くのです。神さまのもと永遠に生きることができると喜びに感謝が溢れてきます。と同時に、天国の希望を持っていない人たちを思うと心が裂ける思いです。主イエスさまの心がもっと私たちの心となりますように。



「アメイジング・グレイス」を！

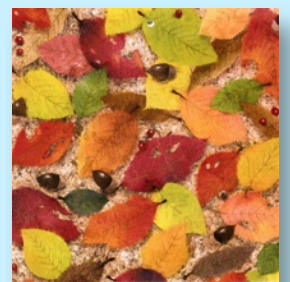
森住ゆき

和紙ちぎり絵作家



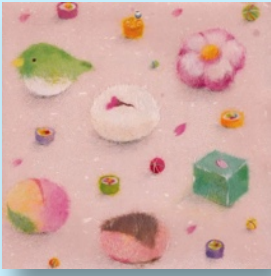
欧州でコロナの再拡大のニュースが伝わって来ています。なつかしいスイスJEGの皆さま、そして欧州各地の皆さま、どのようなアドベントをお過ごしでしょうか。いのちの造り主である神が、皆様お一人一人をあらゆる場合にお守りくださるよう心から祈ります。

日本の教会も、この時期のクリスマス集会はやはりまだ慎重にならざるを得ず心痛むことです。さて、そんな中で東京都立川市にあるJECA立川駅前キリスト教会（高田文彦牧師）の皆さんが、私の和紙ちぎり絵を用いてある動画を作って下さっています。この動画は、12月25日に同教会主催のZOOMによるクリスマス・オンライン集会のために特別に制作されたものです。



私はキリスト教とは全く無縁に育





ち、28歳でクリスチャンになりました。その時のことを「アメイジング・グレイス」と題して出版して頂いたことがあります（いのちのことば社刊）。動画は、その救いの経緯を約30分間でダイジェスト朗読し、20点ほどのちぎり絵の画像を添えたものです。

動画全体のプロデュースは、朗読者でもある同教会員で舞台女優の日高恵さん。長年訓練を積んだプロの読み手の「声の仕事」は素晴らしいものです。さらに同教会の教会奏楽者である高田利花牧師夫人が、内容に寄り添い、深く考え抜かれた選曲をもってピアノ演奏を付けて下さっています。そしてその動画は、12月12日～31日までYouTube上で一般公開されるのだそうです。

動画をプロデュースされた日高恵さんは制作当初から、この動画は日本だけでなく、海外在住のクリスト者のお働きにも活用して欲しい、と強く願って取り組んでおられました。それは立川駅前キリスト教会の皆さんの祈りでもあります。

どうか欧州クリスト者の皆さま、公開は12月12日からです。「立川駅前キリスト教会」でYouTube検索し、ふるってアクセスなさってみて下さい。

立川駅前教会ホームページのイベントURL <http://ekimaechurch.org/?p=4419>



2019年のクリスト者の集いで皆さまとご一緒しては3年。思えばその年の暮れにはコロナが世界に拡がりはじめました。翌2020年3月に、福島第一聖書バプテスト教会（佐藤彰牧師）の関連施設で開催予定だった私のちぎり絵展は、搬入直前で挙行断念（順延）となりました。現在はすべての展示活動が保留停滞していますので、私は今年で13年目に入りたいのちのことば社「月刊マナ」の表紙絵制作と、高齢者施設のパート勤務（マナの表紙と同時期に始めました）に淡々と取り組んでいるところです。展示活動の停滞は残念ですが、それが主のお働きならば、再び動き出す時は必ず来るでしょう。



では、皆様どうか素晴らしいクリスマスシーズンを！

単立行田カバナント教会 会員（埼玉県熊谷市在住）

単立行田カバナント教会 会員（埼玉県熊谷市在住）

## 最後まで主に仕える 脇山多恵子

スイス日本語福音キリスト教会



日本に行くことがこんなに大変になる時が来るなんて思ってもいませんでした。そしてまた教会に行けば兄弟姉妹にお会いすることができるということも当たり前のように思っていました。そんな時突然、大切な姉妹が亡くなられたことを知らされてとても信じられなくて「アーもうこの世でいつも優しく迎えてくれた姉妹に会うことができないんだ」と思ったら涙が溢れて仕方がありませんでした。

そしてその時またいつの日かお会いすることのできる姉妹の死ですらこんなに悲しくて立ち直れないでいることを思った時、まだ神様を信じていない方とはもう二度と会えなくなってしまうということが現実のこととして目の前に迫ってきて、いま語らなかつたら後悔しか残らないということに気付き、何とかして神様のことを伝えたいという思いが与えられました。

直接会えない状態で具体的に何ができるのか祈り求めている時、「手紙」にして神様がどんなに素晴らしいお方であるかを紹介し、この方を通してでなければ神様がおられる御国に入ること、すべての罪が赦され、永遠のいのちを持つことができないということ、そしてなによりもこの私自身が地上生涯のあともずーっと一緒にいたいから唯一の救いの道であるイエス様を信じることを選び取ってほしいと、この先会えなくなることを考えただけでも辛すぎるということを正直に書きました。

私に出来ることは神様という方が私達一人一人を愛し大切に、いつも共にいてくださって、何があっても見捨てることがなく、すべての人を救うために一人子であるイエス様のいのちを、私達の罪を取り除くために犠牲にして、永遠の御国への道を用意して下さり、今も忍耐して一人一人の心の扉をたたき続け、しかも決して強引にあけることはなさらず、中から開かれるのを待っていてくださる憐れみ深い方、そしてことばだけで万物を創造することのできる、人の思いをはるかに超えた唯一絶対のお方がどれ程偉大な存在であるのかということを紹介することだけです。

そしてこれからも神様と同じ思いになって一人でも多くの方が主に会い信じることができるように、良き僕となって最後まで主に従い仕えることを喜びとして生かされていきたいと思ひます。





## 神様からのゴーサイン

本園万子（かずこ）

スイス日本語福音キリスト教会

2017年春、九州の小倉で開催された中川先生の聖書セミナーにて、オリーブの家の理事長・青木さんに初めてお目にかかりました。中川先生のメッセージの中に出てくる、元暴力団の組長さんで、30年の刑を終えられた方です。でも、見た感じ普通の70歳の優しいおじさんです。

その方が、2013年10月、熊本でオリーブの家を立ち上げられました。刑を終えたけれども行き先のない方々のための自立準備ホームです。塀の向こうで受洗され、今では、TVや講演会では引っ張りだこの有名人。人生の再出発はほぼ、10年前。塀の向こうで、この夢を抱き続け、それを実現された方。奥様の順子さんとの二人三脚。誰でも、オリーブの家を訪れる人は口を揃えてこう言います。「ここには愛がある。ここにいるだけでホッとすると」。

その青木さんとの出会いの日から、様々なことがありました。その後、グループホームも立ち上げられました。服役後、身寄りもなく、健康状態もすぐれない高齢の方を期限なしで迎え入れるためです。その時から、弟がそこにいたらという夢を抱き始めました。弟は2014年11月から精神病院の閉鎖病棟に入院していましたが、引き取り手がないまま入院が続いていました。

父は高齢のため、弟の退院に反対していたので、最初にオリーブの家に弟を連れて行ったのは、2018年の春の事でした。弟は、すっかりオリーブの家が気に入り、私の里帰り中には、熊本まで足を延ばし、共に礼拝を守りました。弟の転居の話が持ち上がりましたが、父の強い反対があり、私は途方に暮れました。

そうこうするうちにコロナ禍に入り、状況は厳しくなるばかり。そんな中、2020年10月、青木さんから、弟を受け入れたいという話がありました。丁度、JEGのプリンセス会のお泊り会の最中でした。それまで、教会から少し遠ざかっていた私でしたが、神様から背中を押されるように参加したその場で起きた、神様の恵みでした。そして、オリーブの家の職員さんが、熊本から福岡の病院まで足を運び、弟の転居を進めてくださいました。

2021年1月の私の誕生日の日に、コロナ禍で1年も面会ができなかった弟を連れて、熊本のオリーブの家へと向かいました。その後も、紆余曲折があり、何度も気を揉みましたが、オリーブの家の方々に助けられ、今日に至っています。弟は、8月にはホームシックにかかり、礼拝に出られなくなりました。青木さんは、弟のことを心配し、毎週一度のズーム面会の機会を与えてくださいました。そこでは、聖書の学びをし、弟の質問に答えたり、悩みを聞いたりしています。弟は私の拙い話を聞いたときに、だんだんと元気になっていきました。そして、遂に洗礼の準備ができるほどになりました。

計画されていた11月19日の洗礼式はパスしたものの、「次は僕の番だ」とズーム礼拝のコメントタイムで、告白しました。主の御名を褒めたたえました。11月19日には、3名の職

員さんが受洗されました。どなたも、一度は塀の向こうにおられた方々です。彼らの証を聞き、過酷な人生の中で、罪を犯し、青木さんに出会い、人生をやり直す姿を拝見して、涙しました。感動のひと時でした。

オリーブの家のモットー（最初の礼拝で中川先生が下さったことば）：

1. 人生はやり直しができる
2. あなたは愛されている
3. 神を畏れて生きなさい。神を畏れる人のそばで生きなさい。

青木さんは、オリーブの家から逃亡して、再犯した人を何度でも引き受けられる方です。厳しいけれども、優しい、愛のある方です。ですから、ここには、差別や偏見がありません。個別の対応もされます。スマホがない人には、毎朝、メルマガ「今朝の聖句」を印刷して手渡されます。

現在、全国で服役中の方々と文通の奉仕も、そして、聖書や月刊誌などの差し入れもされています。ですから、遠い所からオリーブの家に来られる方もおられます。もちろん、青木さんは、どこへでも出所される方を迎えに行かれます。再犯された元住居人の裁判に立ち、情状酌量のお願もされ、一度は懲役五年が執行猶予になったこともあります。

今では、熊本刑務所から、オリーブの家に引き取ってほしいとお願いされることもあるそうです。元刑務官の方が、ボランティアに来られたり、ここでは、日々、信じられないことが起きています。毎週、ズーム礼拝に参加するたびに、参加される皆さんの成長がうかがえる不思議なところ。高齢で体が弱くても、早起きをして近所の清掃に励まれたり、体力のある人たちは、畑仕事にも励まれています。近所の方々からの理解も得られるようになり、食料の差し入れや献金、そして、畑の無料使用など、神様は様々な人々を通して、オリーブの家を祝福



順子さん（奥様）私、弟、青木さん（オリーブの家で）しておられます。

そして、入居されている方々、そして、職員さんたちは、口々に、「青木さんに出会ったことで人生が変わり、神様に感謝しています。」と言います。この働きが更に祝福され、多くのクリスチャンが生まれる救いの輪が更に広がって行きますように祈りしています。礼拝には、福祉関係のノンクリスチャンの先生も参加されたりして、ここは、良き伝道の間ともなっています。

弟が、オリーブの家に住めるようになったのは、「弟さんを、一生精神病院に入れたままにするなら、あなたは必ず後悔します。私に任せてくださいませんか？」と青木さんに言わせてくださった神様のお陰です。父から大反対された時に、「お父さんの息子よ。私の弟よ。一生見捨てる気？」と言い返しました。父は小さな声で、「おまえの気持ちはわかるが、おまえが苦勞するだけだから。」と言ったので、「しめしめ、これは、神様からの『Goサイン』だ」と確信して、話をすすめることができました。

ハレルヤ！主よ、心から感謝します。あなたの偉大な御名を褒め称えます。アーメン





## クリスマスの夜の思い出

ウエンディ・ゲルスタ

スイス日本語福音キリスト教会

まだ子供たちが小さかった頃、私たちは札幌に宣教師として暮らしていました。ある夜、子どもたちと一緒に、クリスマスの物語を劇にして演じました。

娘のエリザベスはロッキングホース（ロバ）に乗ったマリア、今は亡き夫ハンス・ウェリはヨセフ。息子のアンドレアスは、飼い葉桶に寝かされた赤ん坊を訪ねてきた羊飼いでした。ヨセフは羊飼いを

演じるアンドレアスに、赤ん坊のイエスさま（大きな熊のぬいぐるみが赤ん坊のかわり）へのプレゼントを何か持っていないかと尋ねました。

「プレゼント？」羊飼いのアンドレアスは、困った表情で考えこみましたが、すこし経て、突然、彼の顔が輝いたのです。大喜び

の表情で「海賊をあげる!!」と叫びました。

アンドレアスは自分が海賊のLEGOを貰って、それはそれは嬉しかったので、どんな男の子でも、LEGOの海賊をプレゼントしてもらったら大喜びするはずだと確信したようです。

いま、思い返しても胸の熱くなる思い出です。こんな夜空に輝くお星様のように美しい、愛おしい思い出を作ってくださいました様ありがとうございます。この感謝の心を、神様、あなたにお贈りします。



## 主の憐れみを味わう

井ノ上歌歩

スイス日本語福音キリスト教会



この一年も主とともに歩むことができ、本当に感謝です！特に今年は、夏にあったキリスト者の集いのユースプログラムの奉仕に関わったことが印象的でした。

奉仕の中で自分の弱さをたくさん突きつけられましたが、その中でさらに主の憐れみを味わう時となりました。昨年、オンラインでしか会っていなかった仲間達と直接会い、共に祈り励まし合うことができた恵みに、心から感謝します！

## ストラスブール初めての日本語礼拝



今村泰典

スイス日本語福音キリスト教会

「第38回ヨーロッパ・キリスト者の集い」が2021年7月29日(木)から8月1日(日)まで、ストラスブールで開催されました。ストラスブールの地は私にとって特別な場所でもあります。何故ならば私は1984年以来37年間、毎週あるいは隔週スイスの自宅からストラス



ブール国立音楽院に通った職場のある所でもあります。そこで、私はフランス語を覚え、ヨーロッパの文化でも、スイスやドイツ、或いはイタリアとも異なるフランス人気質を肌で感じ、フランス文化を目の当たりにしました。そこでの経験は私の人生にとって言い尽くしようもない宝です。

そのストラスブールにあるキリヤン系の宿泊施設CIARUSを「第38回ヨーロッパ・キリスト者の集い」の開催地として富永重厚兄が2019年秋に予約されたと聞き、内心小躍りしました。理由はいくつかあります。それは私がある町を知っているという事のみならず、13年間ストラスブールで「聖書のお話を聴く会」を行っており、そこに集う日本人学生は経済的負担なく集いに集えるというメリットがあったからです。

この「第38回ヨーロッパ・キリスト者の集い」の実行委員の一人として2019年秋から2021年の夏まで合計16回に及ぶ実行委員会に参加し、色々と話し合い、難題を解決しながら、やっと開催にこぎつける事が出来ました。

まず2019年には当初全く思いもよらなかったCOVID-19によるコロナ・パンデミックが2020年に全世界を襲った事で、「第38回ヨーロッパ・キリスト者の集い」の存続自体が危ぶまれました。2020年夏に開催予定だったデュッセルドル



フでのヨーロッパ・キリスト者の集いが5月に完全にキャンセルになったことは、私達実行委員会にとっても大きなショックでした。私達もコロナ禍では心を尽くして計画を立てたとしても、キャンセルせねばならないという思いを持ちつつ、主のご計画を信じつつ進めました。

そして2020年夏にはコロナの状況が少し好転し、このまま落ち着くかもしれないと安堵していた矢先、11月頃からまた感染者が増えだし、再びヨーロッパ中でのロックダウンとなりました。しかしまだ8ヶ月あるという事で、私達はまだ希望を持っていました。しかし2021年、年が明けても感染状況が収まらず、春になっても幾分良くなったものの、感染者数がなかなか下がらず、終息する兆しが一向に見えず、実行委員一同は焦りを感じ始めていました。一番の問題はホテルCIARUSとの契約の事でした。もともと、この様な大きな集会では3年前くらいから予約を始めるのですが、2019年秋、開催2年を切った状態で、集会場を見つけ始めなければならない中、富永重厚兄は奔走し、CIARUSを見つけて下さいました。

しかし、ただ空いていれば良いという事ではなく、全員がリーズナブルな値段で食事付きで宿泊できるという好条件を結べるかが、大きな課題でした。もちろん貸し切りにする為には最低何人以上ならばいくらと言う、人数が多ければ多いほど、私達にとって好条件で宿泊できる事になるので、一番安い値段で宿泊する為には満席の200名宿泊の時の値段をホテルに側に設定して頂くのが普通です。当初の2019年の仮予約の時にはコロナ・パンデミックがまだなかったので、当然200名満室を想定して、値段設定をして頂いていました。ところがコロナが始まって事情が一転しました。私達も何人が申し込むか皆目見当がつかず、また参加者が少ないと当然宿泊費も上がるので、集いで宿泊の値段を設定するのが、とても難しい状況にありました。そこで参加人数もまだわからない状態で見切り発車し、値段設定をし、2021年4月の締め切り、そして5月再度募集しようやく150名弱の参加者を確保できたことは、とても喜ばしい事でした。



ところが、コロナの状況が一向に好転せず、一人キャンセル、二人キャンセル、また教会員全員がキャンセルする教会が現れ、メインスピーカーの牧師がキャンセル、またコロナに罹り奉仕者もキャンセル、また知人や家族などが感染し、カランテーヌの為にキャンセル等など、どんどんキャンセルが続き、最後は100名を切りました。当初の予定の半分以下の参加者で、それでも同じ条件で宿泊させて下さいと言うのは、普通はホテル業としては成り立たないはずなのですが、富永重厚兄の必死の交渉の末、全く今までと同じ条件で宿泊させて頂ける事になったのは、全く神様の憐み以外の何物でもないと思います。挙句の果てにイギリスでは変異株の出現の為、イギリスからの渡航者が全くフランスに入国できなくなり、南ロンドンの清水勝俊牧師またその教会員で実行委員

である上野浩子姉が全くフランスに入れなくなった事は大きな痛手でした。

兎に角そういった中での開催でした。また今回はコロナに感染していないという証明をする為に、全員に初日、入場する時に抗原検査(Antigentest)をして頂きました。結果、どなたも3日間陽性者が現れずに守られました。本当に感謝でした。

今回は講演も素晴らしかったのですが、特に感謝な事がありました。最終日の一日前の土曜日夜の「賛美と証しの夕べ」の時に、ストラスブルに住んでいる音楽学生の後藤千晶姉(スイスJEGの教会員)が、ストラスブルには日本語で集える礼拝が無いと涙して訴えられました。



後藤千晶姉

涙を持って主を礼拝したいという後藤姉の窮状を知った矢吹博牧師、阿部知幸牧師がそれを神様からの召しとしてお受けになられ、一ヶ月半経って、矢吹先生の方から、ストラスブルでの集会でお役に立てることはないですか？と申し出て下さいました。

そこで私達は長年の思いであった礼拝を始めたいことを打ち明け、協力をお願いしました。先生は快諾して下さいましたが、まずはフランクフルト日本語福音キリスト教会の役員会でおっしゃられて、後日役員会に承認された旨をお伝え下さいました。また同時にオルレアンにおられる阿部先生も礼拝のお手伝いをして下さる事を快諾して下さいました。

そういう流れで、11月13日に初めてストラスブルで日本語による礼拝を矢吹先生のもとで捧げる事ができた事を感謝致します。これからはマルチン・マイヤー牧師、矢吹博牧師、阿部知幸牧師と3人の協力牧師を得て、月2回ストラスブルの地で日本語による礼拝を捧げていく予定です。ハレルヤ!

これからこの礼拝が途絶える事無く、主が教会をストラスブルに建てて下さる事を引き続きお祈りして頂けないでしょうか。どうぞ宜しくお願い致します。

第38回ヨーロッパ・キリスト者の集い実行委員



第1回 ストラスブル礼拝 11月13日



## 靈的ルネッサンス

Radnoty Istvan

ミュンヘン日本語キリスト教会

EMAWコースのことを初めて知ったのは2021年3月、ミュンヘン日本語礼拝後の時です。一人の兄弟が「男性グループに参加し聖書から一緒に学びませんか。スタートしたばかりで、今から入っても遅くないですよ。」と声をかけてくれた時でした。それを聞いた瞬間「初対面のメンバーと一緒にオンラインで学びをすることへの違和感と不安」とを思い、どのように断ろうかと最初は考えました。しかしその次に「久々に真剣に聖書を読むチャンスだ」と自分の思いを改めることができ、「とりあえず一回内容を聞きたい」と伝えました。



そして、一週間後予定されていた集会に自分も入れてもらうことになりました。いろいろな背景を持つメンバーの皆様と楽しい話ができ、90分のセッションがあつという間に終わりました。とても暖かく歓迎され、ぜひ継続的に参加するよう励ましの言葉をいただきました。今年の3月以降皆様と定期的に学び、分かち合い、祈りの時を持っています。それを通して様々なことについて考える機会が与えられて、実を言うところ学生時代以来初めての靈的ルネッサンスを経験しています。

神様との関係は自分で責任をもってケアしなければどんどん消えてしまうことに気づくことができ、少しずつ弟子訓練の基本に戻り始めています。日本語で暗唱聖句を覚える宿題はときに難易度も高いですが、自分の成長へ繋がると期待し妥協せず毎回準備を重ねています。また同じように取り組んでいる仲間がいると思うととても励まされるのです。

一つのハイライト：今回グループリーダーを務める永井兄弟と東京で実際会うこともでき、コーヒーを楽しみながら長話の時間が与えられたのです。最後になりますが、現在EMAWブック2で夫婦関係と子育てについて学びを続けており、ますます靈的に作り変えられていくに違いありません。

### イエスキリストの侍 男性を人生の成功へと 導く学び

Every Man a Warrior は男性がキリストの弟子として、神様に喜ばれる人生を歩むための学びである。平凡な人生を生きるためではなく、人生の様々な領域での戦いに勝利し、神が意図した勇士となることを願う男たちのために編纂された。



## Every Man A WARRIOR



「イエスキリストの侍」の恵み

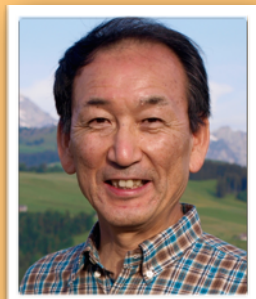
## 神様を愛すること

今井 朗

Bible&Worship Stuttgart

主にある皆さへん、お元気でお過ごしでしょうか？ 昨年8月に長年住み慣れたStuttgartからミュンヘン空港の北側Freisingに家内と共に引っ越しました。引っ越し直後からコロナ感染による長期のロックダウンのため会堂礼拝や家庭集会への参加が制限されました。

そのような中に在欧日本人宣教会の永井敏夫先生から「Every Man



A Warrior (イエスキリストの侍)」以下EMAWの紹介がありました。特に、男性だけの聖書の学びに興味があった私は、欧州在住の数名の兄弟に声を掛け、今年の1月から月2回のペースでZoom配信による「EMAW」の学びが始まりました。

学生の時代に救われ、45年の時が過ぎますが、途中で教会から離れたこと、毎日のディボーションが継続できない信仰の弱さ、いつも罪責感を持ちながらの信仰生活を歩んでいる私にとって神様に喜ばれる弟子として勝利の信仰生活を送るための学びは今までに経験したことがない新鮮な学びでした。

成長するためにどれだけ聖書知識を蓄えるかではなく、熱心に教会活動に参加することでもなく、神様を愛することが最も重要な土台であることを聖霊によって示されました。そしてディボーションを習慣的・律法的に行っていたことを悔い改めて、神様が願っておられる主を愛する関係に焦点を合わせるようになりました。(マタイ22:36-38)

又、スイス、ベルギー、ドイツ、日本からZoomを通して男性クリスチャンとして同じ悩み(夫婦関係、子育て、教会生活、お金など)を持っている兄弟との特別な関係は単なる聖書勉強ではなく、互いに祈り合い、励ましあう関係へと主が導いてくださっています。

この「EMAW」の学びを通して欧州に在住されている男性クリスチャンとの主にある交わりを深め、互いに励ましあい、共にみ言葉に養われて、遣わされている教会で仕える真の弟子として成長して行きたく切に願っています。



「継続は力なり」を実感する日々

永井敏夫

在欧日本人宣教会

私の住んでいる東京都町田市には市営プールがある。そこに併設されているジムに昨年から通うことにした。実は数年前にも数回行ったのだが、休止！昨年から10回ほど行ったと思うが、この数か月足が遠のいている！何だ彼んだと自分に都合の良い理由をつけ、ジムに行かない自分を我ながら意志が弱い人間だと思う。



そんな私にも昨年から途切れずに続いていることがある。

それがこのEvery Man A WARRIOR「侍」だ。毎週一度、または隔週で繋がり、互いにみことばを暗唱し、ディポジションの分かち合いをしている。この学びは男性限定で、夫婦関係、子育て、金銭管理、セックス、試練などのトピックについてテキストから学ぶ。

誰もが自由に思いを分かち合う安心して過ごすこの時間を、私の心は喜んでいる。

レッスンを進めていくというよりは、記されていることをしっかりと受け止めながら、互いに感想を分かち合い、思いを聴きあう時間が何とも素晴らしい。更に示された一節を自分のことばで表現する課題があり、まるで世界にひとつしかない自分訳を自分に向けて口ずさんでいるかのようだ。

物忘れが少しずつ増えてきて、もしかすると他の人に迷惑をかけつつある自分かもしれないが、みことばを何十回と口ずさんでいると少しずつ覚えるようになる。時間がかかればかかるほど、「ああ、神さま、あなたはこのみことばをもっと味わいなさいと言っているのですね。」と思うようになってきた。果たしてこのみことばのように生きているだろうかと思問することもある。

また、みことばを繰り返し口ずさむ中で、またディポジションをする際、同じグループの仲間たちのことを覚えて祈るようになったことも恵みである。ヨーロッパでも複数の国々の男性たちが「侍」に志願し歩んでいる。この侍志願者たちが三冊のテキストを終える頃には、以前より霊的な筋力がついた男性たちが歩み始めていることだろう。私も新たなグループでこのセッションをスタートしたいと願っている。

明日が良い天気なら、私は運動不足の解消も兼ねて、みことばを口ずさみながら散歩に出ようと思う。

EMAWについて：<https://emaw.jp/>

Every Man A WARRIOR



イエスキリストの侍の恵み

こんなアホな私でも

松林幸二郎

スイス日本語福音キリスト教会

欧州でも日本でも男子は教会ではなぜか少数派で肩身の狭い思いをしている。お喋りもぎこちなく、教会での存在感は薄く、パウロが長老となる決まりを手紙に書いてくれなかったら教師や牧師も女性が大半を占めていたのではと思う。実行するかどうかは別にして、弁の立つ男性は政治家や実業家、町の顔役になっている。当然、家庭集会や祈り会でも複数の男性がいれば上出来で、通常、借りてきた猫のようになる。

家庭や夫婦関係、子育てなど男性共通の問題や悩みはやはり同性でないと語りづらい。男性としてどうやって老い

を迎えるかは大問題で、これも異性とは話しづらい。特にヨーロッパ、そして都会以外に住む日本人にとっては同国人の男性に会うことは埋めがたい距離がある。同じキリスト者の男性となると山の彼方の空遠く、といった感覚である。だから男性だけの聖書の学び会や祈り会など夢また夢であった。

それが、過酷で矛盾だらけのコロナ規制の怪我の功名で、EMAWを知ることになった。それが、男性に向けられたセミナーで聖書を学び、お互いに祈り、意見を交換できるということで、思ってもいなかったかたちで夢が実現した。



パズルと一緒にラビユタの城へ飛ぶ！

宿題をやっていないことを気にしながら、月に2回のセッションを楽しむようになった。幸い家内も応援してくれている。成果を期待していたのかもしれないけれど、私は相変わらず散らかし屋で（なにを隠そう、私は猪年である！）物忘れがひどい。結婚して典型的日本人をずっとやってきて、家内や娘3人をあまり褒めず自慢にせず、感謝のことばも乏しい。愛情表現も絶望的にぎこちない。放り出されても文句はいえないのだが、三度の飯より料理が好きで、寿司から中華料理、地中海料理とバラエティに富むのでお抱え料理人としての価値を見いだしてもらったからに違いないと思っている。

こんな阿呆ないつまでも新米クリスチャンを、この学びが始まってから、神様は愛してくださっていることを知って、日に幾度も神様に頭を下げている。この学びをリードしてくれている永井さん、大和魂と忍耐をもって受け入れてくれている侍仲間から感謝している。



## EMAWの恵み

藤原誠

シオンの群教会

EMAWは、クリスチャン男性が実生活の中でみことばに生きようになるためのグループトレーニングプログラムで、私は現在、自分の父親世代の男性の方々のグループに混ぜていただいてオンラインで一緒にさせていただいています。

ミーティング自体は月二回ですが、テキストを使った日々のデボーションや暗唱聖句、テキストの予習が毎回の宿題となっており、最初はそれらが結構負担に感じていました。リーダーをしてくださっている永井さんが最初にこのEMAWミーティングのことを「互いに助けると言い合える交わり」という言葉で説明してくださいましたが、その言葉の通り、さばき合うのではなく、互いに励まし合い祈り合いながら、この地上の生活においてサタンに立ち向かうための霊的なトレーニングをさせていただいています。



同期受講のラドさん（ハンガリー出身）と。

全3巻のうち現在はまだ第2巻の序盤ですが、第1巻で学んだデボーションにおける祈りは「WARの祈り」と呼ばれるもので、WARはWorship(礼拝する)、Admit(罪を認める)、Request(願う)の頭文字です。私たちの祈りはともすればRequestだけのものになりがちですが、まずは神様がどういうお方かを思い出して礼拝をし、そしてありのままの自分自身を見つめて罪を告白し、それから願いを話す。そのうえでみことばを通して語ってくださる御霊の声に耳を傾ける。この順番が大切だということを私はこれまでのEMAWミーティングを通して強く実感させられています。

立場も経験も年の差も関係なく互いを「さん」付けて呼び合い、正直な思いや経験、課題や葛藤までも互いに共有し分かち合うことができる主にある「兄弟」の関係がEMAWミーティングを通して与えられていることに感謝しています。

## Every Man A WARRIOR



“イエスキリストの侍”の恵み

## 御言葉に生きるために

川上寧(やすし)

Japanese Christ's Disciples  
(VIANOVA)

このEvery Man A Warrior (以下EMAW)のプログラム(訓練)に参加できたのはとても幸いなことです。在欧日本人宣教会のメールの中で紹介されていた案内に心惹かれるものを感じながらも、日常生活での雑事をつい優先してしまう私の悪癖から、問い合わせをすることもなくただ時間だけが過ぎていました。

最初の案内を目にしてから数カ月経った頃、ヨーロッパの日本人キリスト者の間でもEMAWの訓練が始まったことを耳にし改めて、自分も参加したいという思いを強くしました。妻がその思いを後押ししてくれたこともあり、遅れての参加ではありましたが仲間に加えていただきました。

EMAWの特色は男性が人生において直面するあらゆる問題に対して、御言葉の光に照らされながら、正面から向き合うことです。男女共に学びあう場ももちろん必要ですが、男性特有の課題は男性同士、女性特有の課題は女性同士が分かち合い、学ぶことも大切だと思います。特に男性は、特別にそのような機会を設けなければ、なかなか腹を割って話すことができない方も多いのではないのでしょうか。私自身、この学びと交わりの時は貴重なものとなっています。



妻も公認のEMAW

また、EMAWはそれだけではありません。創設者のロニー・バーガー師はこう語ります。「男性が真に深いレベルで霊的に成長するのは、彼らが霊的真理を他の男性に教え始める時なのです。」学んだ者は教える者となり、キリストの弟子の輪が広がっています。共に学べる方、募集中です！

